

# スポーツ・ボランティアの参加動機、 組織コミットメントと継続意欲

—地域の障害者スポーツ団体を支えるボランティア—

松本耕二・北村尚浩・國本明德・仲野隆士

# スポーツ・ボランティアの参加動機、組織コミットメントと継続意欲

— 地域の障害者スポーツ団体を支えるボランティア —

松本耕二<sup>1)</sup> 北村尚浩<sup>2)</sup> 國本明德<sup>3)</sup> 仲野隆士<sup>4)</sup>

## The relationship between motivations, organizational commitment, and continuation will toward volunteer activity in community sport

Koji Matsumoto<sup>1</sup>, Takahiro Kitamura<sup>2</sup>, Akinori Kunimoto<sup>3</sup> and Takashi Nakano<sup>4</sup>

### Abstract

The purpose of this study was to measure the organizational commitment of volunteers at a community sport program level and to explain the relationship between their motivation for the program and the will to continue. The research questionnaire was designed for and the data was collected from 242 volunteers of the Special Olympics Nippon. These volunteers provide sport programs in Japanese communities for individuals with mental retardation.

First, the factor analysis was performed to identify the factor structure underlying the volunteer's motivations for the program and the factor score was computed for the regression analysis. After this, the regression analysis was performed to explain relationships between their motivation for the program and organizational commitment toward the Special Olympics. The main results are as follows:

- 1) Eight motivational factors were identified and named: (1) self-actualization, (2) support to athlete, (3) sports, (4) contribution to society, (5) support for the program, (6) reward, (7) recreation and (8) invitation.
- 2) Volunteers who showed a high level score at "support to athlete" and "support to program" have a stronger commitment than others. Those volunteers who expressed the attitude that they expected rewards for their activities scored a minus in the organizational commitment.
- 3) The motivation that was based on direct support and interest to the athlete determined the organizational commitment of male volunteers. The motivation that was based on self-actualization or concept of service obtained from supporting the athlete determined the commitment of the female volunteers.
- 4) Female volunteers have a higher organizational commitment to the program than male volunteers as determined by various motivations for the program.

These results suggest that there could be a concern for the continuation of the volunteer in the organization and a concern for the sustainability of the organization.

**Key words: organizational commitment, motivation, continuation will, sports volunteer**

<sup>1)</sup> 山口県立大学社会福祉学部  
〒753-8502 山口市桜島3-2-1

<sup>2)</sup> 鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センター  
〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地

<sup>3)</sup> 東京YMCA 社会体育・保育専門学校  
〒135-0016 東京都江東区東陽2-2-15

<sup>4)</sup> 仙台大学体育学部  
〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南2-2-18

*1. Faculty of Social Welfare, Yamaguchi Prefectural University, Yamaguchi City, Yamaguchi 753-8502*

*2. National Institute of Fitness & Sports, Kanoya City, Kagoshima 891-2393*

*3. Tokyo YMCA College of Physical & Early Childhood Education, Toyo, Kouto-ku, Tokyo 135-0016*

*4. Faculty of Physical Education, Sendai University, Shibata, Miyagi 989-1693*

キーワード：組織コミットメント、参加動機、継続意欲、スポーツ・ボランティア

## はじめに

スポーツの多様化とともにスポーツの組織化が進む今日、アスリートやプレイヤーとして「する」スポーツのみでなく、クラブ・団体や連盟、リーグ、イベント運営等、「ささえる」スポーツの重要性が認識されるようになってきた。このようなスポーツ場面(運営)においては、従来、過去にそのスポーツ(種目)に関わりの深かった人々が携わってきたが、これまでスポーツに関わりの薄かった人々も「ボランティア」として地域のクラブ・団体やイベントの運営等を支援する場面が多く見受けられ、新たなスポーツの享受(参与)形態として確立されつつある。このスポーツ・ボランティアは、地域におけるクラブや団体の活動を指導者や運営スタッフとして日常的にサポートする活動と、世界選手権大会のような国際大会や地域のスポーツ大会の運営をサポートする活動とに大別される。前者はコミュニティ・ボランティア、後者はイベント・ボランティアに分類され(笹川スポーツ財団, 1996)、国内の参加率は7.0%とも報告されている(笹川スポーツ財団, 2002)。

これまでのスポーツ・ボランティアに関する研究は、主にイベント・ボランティア(長ヶ原, 1991;川西ら, 2001:2002;前田・川西, 1997;松本, 1992:1999:2003;佐藤ら, 1996;など)を対象としたものが多く、日常において定期的に活動するコミュニティ・ボランティアを対象としたものは少ない。

地域のスポーツクラブや団体における人的資源としてのボランティアは重要な役割を担っている(松岡・小笠原, 2002)。今日の地域でのスポーツ少年団やスポーツクラブ等では、既存クラブの7割が指導者や運営スタッフが不足(クラブひょうご21, 2002)との報告にみられるように慢性的なボランティア不足にあり、ごく限られた数のスタッフでまかなわれている実情がある。このような状況の中、組織の構成員たるボランティアの不足や離脱は、組織活動の成否、ひいては組織の死活問題に発展する危険性をも孕んでいる。これからの地域スポーツクラブにおいては、ボランティア指導者の発掘・養成(山口, 2003;Heinemann, 2003;Koski, 2003;Ibsen, 2003)等、ボランティアスタッフの募集、活動継続、活躍(植田,

2002)が重要な課題となる。

このようなことからスポーツ・ボランティアの必要性や重要性が高まるにつれ、スポーツを支える活動への参加促進や活動継続、離脱予防に関する知見の集積が急務になることは明かである。

安藤・広瀬(1999)は、社会的アイデンティティ理論の視点から、ボランティア個人の組織に対する帰属意識が強ければ組織にとどまり活動を続ける予測因として有効であることを報告している。その一方で、ボランティア組織に対する帰属意識を強化する要因が少ないことやボランティア組織の複雑さ等の課題を挙げ、更なる研究知見の必要性を説いている。

本研究では、スポーツ活動を組織的にサポートするボランティアの活動継続に影響を及ぼす要因として、組織コミットメントに着目することにした。

一般にコミットメントとは、特定の集団や社会規範、目標などに対する内的な献身(社会学小辞典, 1985)として捉えられ、それらに対する同一性やロイヤルティなどの概念を包括するものである。組織コミットメントとは特定の組織に対する個人の同一性や関与の強さ(Mowday et al., 1982)とされ、メンバーの組織からの離脱を予測する上で職務満足度よりも高い判別力を持つ(Porter et al., 1974)ことが明らかにされている。このような構成員の組織に対する同一性やロイヤルティを包括的に捉えようとする組織コミットメントの概念をスポーツ集団に適用しようとする試みもある(Cuskelly and Boag, 2001; Cuskelly et al., 1998; Guskelly, 1995; Haggerty and Denomme, 1991など)。これらの研究は、クラブマネジメントの視点からスポーツクラブのメンバーのコミットメント形成(Haggerty and Denomme, 1991)や、ボランティア役員の離脱行動の予測因としての有効性を検証したもの(Cuskelly and Boag, 2001)など、ボランティアやメンバーの継続といった課題を解決するための、糸口を与え得るものである。

本研究では、スポーツにおけるボランティアの活動への参加動機や組織コミットメントを測定し、組織マネジメントのための基礎資料を得るための調査を実施した。特に、ボランティアの存在が組織的な活動を実施するうえで重要となる障害者スポーツ団体のボランティアを対象として、ボランティアの活動継続意欲との関連を検討したので報告したい。

## 方 法

### 1. 調査の対象

本研究では、コミュニティ・ボランティアとして地域に根ざして活動するスペシャルオリンピックス日本のボランティア（以下、SO と略す）を対象とした。SO の活動は、「アスリート」と呼ばれる知的発達障害を持つ子どもや大人に、日常的なスポーツプログラムを継続的に提供している。その運営は、原則的にボランティアによってなされ、ボランティアの存在はSO の活動と組織を維持していくためには必要不可欠な存在である。なお SO の活動に係わるボランティアは、交通費や昼食代などの実費等もすべて個人負担が原則とされている。

本調査は、2002年8月のSO 夏季全国大会に参加した全国23地区の組織を対象集団とし、そこで定期的かつ継続的に活動しているボランティアを対象に、2002年8月から9月にかけて郵送法による質問紙調査を実施した。

配布数は550、回収数（率）は242（44.0%）であった。

### 2. 分析方法

調査内容は、個人的属性、活動状況、組織コミットメント、参加動機などの要因群によって構成されている。組織コミットメントに関する項目は、Mowday et al. (1982) の Organizational Commitment Questionnaire (OCQ) を邦訳し、SO に関するワーディングに修正して用いた。5段階のリッカートタイプ尺度で測定された OCQ 項目（15項目）について、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5段階評価順にそれぞれ1から5の得点を与えて数量化した。ただし、組織に対する否定的態度を表す6項目については、得点を逆転させて数量化した。また参加動機は、松本（1999）のボランティア動機30項目を用いた。数量化には「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5段階評価順にそれぞれ1から5の得点を与え、因子分析（主因子法、バリマックス回転）によって参加動機因子の抽出を行った。そして、それぞれの関連性をみるために組織コミットメントを従属変数、参加動機因子を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行い、組織コミットメントを規定する参加動機因子を明らかにした。さらに、参加動機因子と組織コミットメントを独立変数、活動継続意欲を従属変数としたステップワイズ法によ

る重回帰分析を行い、活動継続意欲への規定力を検証した。

## 結果及び考察

### 1. サンプルの属性

サンプルの属性を表1に示している。性別では男性が50.4%、女性が49.6%とほぼ同数であった。年代別にみると20歳代が26.6%、次いで50歳代（24.1%）、40歳代（21.1%）と続き、全体としては40歳代以上の中高年が半数以上を占めている。平均年齢は40.7歳であった。

職業で最も多かったのは会社員（24.1%）で、以下学生（18.3%）、公務員（14.9%）と続いている。最終学歴では4年制大学卒が46.0%と半数近く、次いで高校卒（28.9%）、短大・高専卒（11.7%）の順であった。また、1ヶ月あたりの小遣い額では4万円以上と回答した者が最も多く（26.9%）、3万円以上の者と合わせると半数以上を占めていることがわかる。それに対してボランティアに係る1ヶ月あたりの自己負担は1,000円から3,000円程度と回答した者がほぼ半数であった。

活動場所への所要時間は概ね1時間以内であり、活動の継続期間は3年未満と回答した者が半数を超えた。また6割近くの者が身近に障害者がいると回答している。

### 2. ボランティア参加動機

参加動機に関する30項目に因子分析を施し、参加動機を構成する因子を抽出した。その結果8つの因子が抽出されたが、因子負荷量が0.4に満たない4項目をオミットして26項目で再度因子の抽出を行った。その結果、固有値が1以上の8因子が抽出された。これら8因子による累積寄与率は58.7%で、全分散の約6割を説明する結果となった（表2）。

表1 サンプルの属性

	n	%		n	%
性別			最終学歴		
男性	122	50.4	中学校	7	2.9
女性	120	49.6	高校	69	28.5
			専門学校	18	7.4
年齢			短大・高専	28	11.6
10歳代	18	7.4	大学	110	45.5
20歳代	64	26.4	大学院	7	2.9
30歳代	21	8.7	N.A.	3	1.2
40歳代	51	21.1			
50歳代	58	24.0	身近な障害者		
60歳代以上	29	12.0	家族	34	14.0
平均	40.7歳		親族	28	11.6
			友人・知人	74	30.6
婚姻状況			知らない人だがよく見かける	24	9.9
未婚	106	43.8	たまに見かける	35	14.5
既婚	135	55.8	いない	44	18.2
N.A.	1	0.4	N.A.	3	1.2
小遣い（月額）			活動場所までの所要時間		
5千円未満	7	2.9	15分以内	46	19.0
5千－1万円未満	14	7.0	15－30分	88	36.4
1－2万円未満	47	19.4	31－45分	37	15.3
2－3万円未満	37	15.3	46－60分	42	17.4
3－4万円未満	63	26.0	1時間－1時間30分	20	8.3
4万円以上	65	26.9	1時間31分－2時間	5	2.1
			2時間以上	3	1.2
職業			自己負担額（月当たり）		
会社員	58	24.0	なし	33	13.6
団体職員	15	6.2	千円程度	50	20.7
公務員	36	14.9	3千円程度	74	30.6
自営業	19	7.9	5千円程度	29	12.0
主婦	23	9.5	5千円－1万円	22	9.1
学生	44	18.2	1万円以上	10	4.1
パート・アルバイト	23	9.5	N.A.	24	9.9
無職	13	5.4			
その他	10	4.1	活動期間		
N.A.	1	0.4	1年未満	53	21.9
			1－2年	51	21.1
			2－3年	31	12.8
			3－4年	26	10.7
			4－5年	30	12.4
			5年以上	48	19.8
			N.A.	3	1.2

表2 参加動機の因子分析結果

参加動機因子	累積寄与率	因子負荷量	Cronbach's $\alpha$
<b>【自己実現】</b>	11.9		0.862
新しい知識や経験を得たい		0.826	
多くの人と出会いたい		0.786	
社会的な視野を広げたい		0.640	
自分自身が成長したい		0.549	
ボランティア活動に興味がある		0.446	
身につく技術や技能が得られる		0.429	
<b>【選手支援】</b>	22.0		0.834
参加者（アスリート）に関心がある		0.798	
参加者（アスリート）の活動を支援したい		0.720	
障害者に関心がある		0.701	
参加者（アスリート）と交流できる		0.644	
<b>【スポーツ】</b>	30.5		0.725
スポーツに関心がある		0.832	
スポーツ活動を支援したい		0.750	
自分の知識や経験を生かしたい		0.455	
余暇時間を有効に活用したい		0.420	
<b>【奉仕】</b>	36.9		0.772
活動を通して社会の役に立ちたい		0.812	
他の人の役に立ちたい		0.714	
<b>【プログラム支援】</b>	42.8		0.751
イベント（プログラム）運営に役立ちたい		0.667	
イベント（プログラム）を盛り上げたい		0.646	
イベント（プログラム）に興味がある		0.494	
<b>【報酬】</b>	48.7		0.633
記念品などがもらえる		0.647	
何らかの報酬を得たい		0.568	
他の人から認められたい		0.568	
<b>【気晴らし】</b>	53.8		0.770
ストレス解消になる		0.803	
気分転換になる		0.608	
<b>【依頼】</b>	58.9		0.726
知人や友人に強く頼まれた		0.840	
SOから依頼された		0.649	

まず第1因子は、「新しい知識や経験を得たい」「多くの人と出会いたい」「社会的な視野を広げたい」「自分自身が成長したい」など、ボランティア活動を通して自分の経験や他者との出会い、社会的な視野を広げ、活動者自身の人間的な成長を期待する因子と考えられる。よって「自己実現」とした。第2因子では、「参加者（アスリート）に関心がある」「障害者に関心がある」「参加者（アスリート）の活動を支援したい」といった競技への参加者に対する関心や支援を示す項目によって構成されている。よって「選手支援」とした。続く第3因子は、「スポーツに関心がある」「自分の知識や経験を生かしたい」というように、自己の持つスポーツ経験や関心を核として参加者のスポーツ活動を支援しようとする態度を示す因子と考え、「スポーツ」と命名した。第4因子を構成する項目は、いずれ

も社会や他者への貢献を表す動機である。よって「奉仕」とした。第5因子は、「イベント（スポーツプログラム）運営に役立ちたい」「イベント（スポーツプログラム）を盛り上げたい」「イベント（スポーツプログラム）に興味がある」と、いずれもイベントやSOの中心的活動であるスポーツプログラムに対する興味や関心を示す項目で構成されている。活動を支援していく態度を示す因子と解釈し、「プログラム支援」とした。第6因子は、「記念品がもらえる」「何らかの報酬を得たい」「他の人から認められたい」というように、活動に対する見返りを期待する項目に高い因子負荷量を示している。ボランティア活動を通して他者からの承認や報酬を期待する態度を示していると解釈し、「報酬」因子とした。第7因子は、「ストレス解消になる」「気分転換になる」という、自分の気晴らし

やレクリエーションの一つとしてボランティア活動を捉えている。よって「気晴らし」と命名した。最後の第8因子を構成する2項目は、いずれも他者から参加を要請され他律的にボランティア活動に参加したことを示す因子である。よって「依頼」とした。

ところで、今回抽出された因子の安定性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数は、いずれも0.6以上の値を示しており、今回抽出された8因子は比較的安定した因子と解釈できる。

これらの結果から、コミュニティ・ボランティアの活動への参加動機が多様な因子で構成されていることが明らかとなった。松岡ら（2002）は非営利スポーツ組織のボランティア参加動機を質的に分析し、「社交」「学習経験」「個人的興味」「キャリア」「自己陶冶」「組織的義務」「社会的義務」「スポーツ」の8要素を提示し、Chelladurai（1999）や Clary et al（1998）らの先行研究と整合性の検証を行っている。本結果もこれら構成要素と内容的に合致するものでありその妥当性が確認されたと言えよう。さらにスポーツイベントのボランティアを対象とした研究（松本，1999）においても同様の因子が抽出され、両者の参加動機の構造に共通する部分があることが示唆されている。

ボランティアの参加動機は「愛他（利他）的動機」と「個人（利己）的動機」に大きく二分（Henderson, 1981）される。愛他的動機はボランティアの参加動機で主要な因子とされるが、本研究では「選手支援」とともに、「自己実現」や「スポーツ」にみられるような個人（利己）的動機が高い寄与率を占めている。これはスポーツ活動を通して何らかの教示を得たいとい

う欲求と、自らがもつ技術や知識をボランティア活動という場において表出させたいというある種の自己顕示欲の現れと捉えることができるだろう。さらに、他律的な参加や、物的あるいは精神的な報酬を期待しつつ活動に取り組んでいる様子も浮き彫りにされている。

### 3. 組織コミットメント

組織コミットメント項目の平均値を、表3に示している。組織に対して否定的な態度を示す6項目については、尺度を逆転させて数値化している。よって、いずれの項目も得点が高い（最高5点）ほど組織に対しての肯定的な態度を表しており、組織に対するコミットが強いと解釈することができる。

それぞれの項目の平均値をみると、最も高い値を示したのはSO活動からの離脱を表す項目（4.55）で、SOにとどまり活動を継続しようという意思がみとれる。また、SOへの愛着心を表す項目も4.31という高い値を示している。さらに、SOでの活動から多くのことが得られたと強く感じている様子が窺える。全項目の平均は3.72であり、サンプルのSOに対する組織コミットメントは相対的に低くはないことが明らかになった。組織コミットメントの測定には、否定的な態度を示す6項目を除外して組織コミットメントとするショート・バージョンの設問が用いられるケースもある（Guskelly et al., 1998）。特に、尺度の信頼性係数が著しく低い場合にそのような手法がとられるようであるが（Mowday et al., 1982）、本研究で用いた15項目からなる組織コミットメントの信頼性係数は0.760を示しており、15項目の合計得点を組織コミッ

表3. 組織コミットメントの平均値

	Mean	S.D.
活動がうまくいくように周囲の期待以上の努力をしている	3.26	0.92
友人にSOの素晴らしさについて興味を持つように話す	3.72	0.99
SOへの愛着心はほとんどない	4.31	0.86
SOの活動を継続するためにどんな役割でも引き受ける	3.15	0.90
自分とSOの価値観がとてもよく似ていると思う	3.51	0.91
SOのメンバーであることを他の人に話すことが誇りに感じる	3.74	0.96
SOより他のボランティア組織の方が活躍できる	3.88	0.89
SOはボランティアとしての能力を十分に引き出してくれる	3.50	0.83
SOを脱会しようと考えている	4.55	0.81
SOのメンバーになろうと決めたことをとてもうれしく思う	3.94	0.95
漠然とSOに尽くしていても得られることがあまりない	4.17	0.89
SOの活動方針にしばしば同意できないことがある	3.67	0.99
SOの将来が本当に気になる	3.42	1.07
SOはボランティアとして活動するための最適な団体だ	3.71	0.90
SOでボランティアを始めたことは明らかに私の誤りだ	3.30	1.60
組織コミットメント全体	3.72	0.47

Cronbach's  $\alpha = 0.760$

表4 組織コミットメントと参加動機の重回帰分析結果  
(全体 n=236)

参加動機因子	$\beta$	t	
選手支援	0.374	6.671**	R=0.531*
奉仕	0.192	3.427**	R <sup>2</sup> =0.282
自己実現	0.164	2.902**	
プログラム支援	0.147	2.610*	
報酬	-0.132	-2.358*	
スポーツ	0.112	1.989*	

\*p < .05 \*\*p < .005

表5 組織コミットメントと参加動機の重回帰分析結果  
(男性 n=118)

参加動機因子	$\beta$	t	
選手支援	0.494	6.121**	R=0.494* R <sup>2</sup> =0.244

\*\*p < .005

表6 組織コミットメントと参加動機の重回帰分析結果  
(女性 n=118)

参加動機因子	$\beta$	t	
奉仕	0.321	4.226**	R=0.597*
自己実現	0.320	4.188**	R <sup>2</sup> =0.358
選手支援	0.268	3.470**	
プログラム支援	0.234	3.066**	
依頼	-0.212	-2.772*	

\*p < .05 \*\*p < .005

トメントとして扱うことは妥当と判断できる。

次に、因子分析によって抽出された参加動機因子による組織コミットメントの規定力を検証するため、組織コミットメント項目の合成得点を従属変数とし、因子分析によって抽出された「自己実現」「選手支援」「スポーツ」「奉仕」「プログラム支援」「報酬」「気晴らし」「依頼」の参加動機因子得点の平均値を独立変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。重回帰分析にあたっては独立変数相互間で高い相関を示す多重共線性の問題に配慮する必要がある。本研究で独立変数として扱う参加動機は、互いに独立した因子を抽出することを目的とする因子分析によって算出された因子得点を用いているため、参加動機相互間での相関は認められない。

サンプル全体では、標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) の値が最も高かったのは「選手支援」(0.374) で、組織コミットメントに対して最も強い影響を与えていることが分

かる。以下、「奉仕」(0.192)、「自己実現」(0.164)、「プログラム支援」(0.147)、「報酬」(-0.132)、「スポーツ」(0.112) の順であった。これらの参加動機因子と組織コミットメントとの重相関係数 (R) は0.531、R<sup>2</sup>=0.282を示している(表4)。一方、「気晴らし」「依頼」の2因子はモデルから除外された。この結果から、選手そのものに対する支援やスポーツを中心とした活動プログラムをサポートしようとする態度が強い者ほど、組織に対するコミットメントが強いと考えることができる。また、活動を通して報酬を得ようとする態度は組織コミットメントに対してマイナスに作用する様子が窺える。

続いて男女別に同様の分析を行うと、男性では「選手支援」のみがモデルに投入され ( $\beta=0.494$ , R=0.494, R<sup>2</sup>=0.244)、この因子による規定力が大きい(表5)。一方女性では、5つの因子がモデルに投入され、 $\beta$ の値が最も大きかったのは「奉仕」(0.321)で、次いで「自己実現」(0.320)、「選手支援」(0.268)、「プログラム支援」(0.234)「依頼」(-0.212)の順であり、R=0.598、R<sup>2</sup>=0.358を示した(表6)。すなわち、男性の組織コミットメントを規定する参加動機としては、プログラムへの貢献や自己実現というよりもむしろ、活動者である選手に対する直接的な支援や関心に基づく動機であることが分かる。また、女性では選手や活動に対する直接的な支援や関心というよりも、それらを支援することから得られる、より大きな概念としての奉仕や自己実現といった参加動機によって組織コミットメントが規定されており、他者からの依頼による他律的な動機による参加は組織コミットメントに対してマイナスに作用することが明らかになった。

最後に活動継続意欲を従属変数として、参加動機と組織コミットメントの規定力を見てみる。サンプル全体の分析では、分析に投入されたのは組織コミットメント ( $\beta=0.560$ ) と選手支援因子 ( $\beta=0.164$ ) の2つであった。重相関係数 (R) の値は0.642で、規定力を示すR<sup>2</sup>の値は0.412であった(表7)。こうしてみると、さまざまな参加動機によって規定される組織コミットメントが、活動の継続意欲に対して強い規定力を持っていることがわかる。つまり、従来の組織コミットメント研究によって得られてきた、職務(活動)からの離脱を予測する因子として組織コミットメントの有効性を支持するものであるといえよう。

さらに、男女別にみると男性では組織コミットメント ( $\beta=0.417$ )、選手支援因子 ( $\beta=0.277$ )、スポーツ因子 ( $\beta=0.145$ )、依頼因子 ( $\beta=-0.147$ ) の4つ

表7 組織コミットメント、参加動機と継続意欲の重回帰分析結果 (全体 n=234)

	$\beta$	t	
組織コミットメント	0.560	10.206**	R=0.642*
選手支援	0.164	2.992**	R <sup>2</sup> =0.412

\*p < .05 \*\*p < .005

表8 組織コミットメント、参加動機と継続意欲の重回帰分析結果 (男性 n=117)

	$\beta$	t	
組織コミットメント	0.417	5.007**	R=0.651*
選手支援	0.277	3.345**	R <sup>2</sup> =0.424
依頼	-0.147	-2.048**	
スポーツ	0.145	1.996*	

\*p < .05 \*\*p < .005

表9 組織コミットメント、参加動機と継続意欲の重回帰分析結果 (女性 n=117)

参加動機因子	$\beta$	t	
組織コミットメント	0.684	10.057**	R=0.684** R <sup>2</sup> =0.468

\*p < .05 \*\*p < .005

の変数が投入され (表8)、重相関係数 (R) は0.651を示したのに対して、女性では投入された変数は組織コミットメント ( $\beta=0.684$ ) のみで重相関係数 (R) は0.684であった (表9)。つまり、男性の活動継続意欲は活動者自体に対する関心の強さや支援したいという意欲、あるいは自己の経験に基づく自律的な参加動機によって強く規定されているのに対して、女性の活動継続意欲は、さまざまな参加動機によって規定された組織コミットメントによって強く影響を受けていることが明らかである。

## 結 語

本研究では知的発達障害者のスポーツ活動を支援するコミュニティ・ボランティアを対象として、その組織コミットメントを測定し参加動機と活動継続意欲との関連について、ステップワイズ法による重回帰分析を用いて検証してきた。主な結果は次のとおりである。

1) 因子分析によって参加動機を構成する8因子を抽出し、それぞれ「自己実現」「選手支援」「スポーツ」「社会貢献」「プログラム支援」「報酬」「気晴らし」「依頼」と命名した。

2) 選手自体に対する支援やスポーツを中心とする活

動プログラムに対する支援的な参加動機が強い者ほど、組織に対して強くコミットしている。また、活動に対して見返りを期待するような態度は、組織コミットメントにマイナスに作用する。

3) 男性では活動者に対する直接的な支援や関心に基づく参加動機が、女性においては活動者を支援することによって得られ、より大きな概念としての奉仕や自己実現といった参加動機が組織コミットメントを規定している。

4) さまざまな参加動機によって規定されている組織コミットメントが、活動の継続意欲に対して影響を与えており、それは男性よりも女性の方で顕著である。

以上の結果から、活動への導入となる参加動機によって組織に対する同一性やロイヤルティの強さを示す組織コミットメントが影響を受け、ひいては活動の継続意欲に影響を及ぼしていることが明らかとなった。このことはコミュニティ・ボランティアの活動継続といった個人的な問題のみならず、組織の存続といった視点からも重要な示唆を得るものである。すなわち、活動への参加動機に応じて適切な教育プログラムや活動プログラムを計画することで、コミュニティ・ボランティアの組織コミットメントを強化することが可能であり、組織運営のためのキーパーソンを発掘するためにも有効であると考えられるからである。

本研究では知的発達障害者のスポーツ活動を支える団体のボランティアを対象にしたが、政策的に展開されている総合型地域スポーツクラブをはじめとする地域に根ざしたスポーツ組織運営にも資すると思われる。スポーツ活動を日常的に支えるコミュニティ・ボランティアについての研究は、その重要性にも関わらずようやく緒についたところである。この種の研究の蓄積が急務の課題と言えよう。

本研究は、平成14-15年度文部科学省科学研究費補助金奨励研究B (課題番号14780020) による研究成果の一部である。

## 文 献

- 安藤香織・広瀬幸雄 (1999) 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因. 社会心理学研究15 (2): 90-99.
- Becker, A. (2003) Sports clubs and sports development in the district of Neuss, Germany. In Program and Abstract of the International symposium on the promotion of community sports clubs and club life; 2003 Feb 14-16; Kagoshima, National Institute of Fitness & Sports: pp.119-126.
- Breuer, C. (2003) New approaches in sport development planning. In Program and Abstract of the International symposium on the promotion of community sports clubs and club life; 2003 Feb 14-16; Kagoshima, National Institute of Fitness & Sports: pp.89-94.
- Buchaman, B. (1974) Building organizational commitment: The socialization of managers in work organizations. Administrative science quarterly 19: 533-546.
- 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究: ボランティアの継続意欲の視点から. 鹿屋体育大学研究紀要 6 : 69-75.
- Cuskelly, G. and Boag, A. (2001) Organizational commitment as predictor of committee member turnover among volunteer sport administrators: Results of a time-lagged study. Sport management review 4: 65-86.
- Cuskelly, G., McIntyre, N. and Boag, A. (1998) A longitudinal study of the development of organizational commitment amongst volunteer sport administrators. Journal of sport management 12 (3): 181-202.
- DeCtiis, T.A. and Summers, T. P. (1987) A path analysis of a model of the antecedents and consequences of organizational commitment. Human relations 40 (7): 445-470.
- Guskelly, G. (1995) The influence of committee functioning on the organizational commitment of volunteer administrators in sport. Journal of sport behavior 18 (4): 254-269.
- Haggerty, T.R. and Denomme, D. (1991) Organizational commitment in sport clubs: A multivariate exploratory study. Journal of sport management 5 : 58-71.
- Heinemann, K. (2003) Sport clubs as a social community. In Program and Abstract of the International symposium on the promotion of community sports clubs and club life; 2003 Feb 14-16; Kagoshima, National Institute of Fitness & Sports: pp.138-146.
- 濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘編 (1985) 社会学小事典. 有斐閣. 東京.
- Henderson, KA. (1981) Motivations and perceptions of volunteerism as a leisure activity. Journal of Leisure Research 13:208-218.
- Ibsen, B. (2003) Voluntary organised sport in Denmark. In Program and Abstract of the International symposium on the promotion of community sports clubs and club life; 2003 Feb 14-16; Kagoshima, National Institute of Fitness & Sports: pp.171-179.
- 板倉宏昭 (1999) 3次元組織コミットメントと組織貢献度. 日本経営システム学会誌16 (1): 7-12.
- 川西正志・北村尚浩・萩裕美子・前田博子・柳敏晴・吉武裕・野川春夫・田畑泉・志村正子・坂元譲次・鈴木漠 (2001) 第13回全国スポーツ・レクリエーション祭参加者・ボランティア調査報告書. 鹿屋体育大学.
- 川西正志・北村尚浩・萩裕美子・吉武裕・前田博子・柳敏晴・野川春夫・田畑泉・志村正子・水上博司・長登健・早瀬健介 (2002) 第14回全国スポーツ・レクリエーション祭参加者・ボランティアに関する研究. 生涯スポーツ実践研究年報 : 11-26.
- Koski, P. (2003) Promotion of sport and sports club life: Finnish perspective. In Program and Abstract of the International symposium on the promotion of community sports clubs and club life; 2003 Feb 14-16; Kagoshima, National Institute of Fitness & Sports: pp.155-161.
- 前田博子・川西正志 (1997) スポーツ・ボランティアの情報チャンネルに関する研究: 1995世界体操選手権鯖江大会について. 兵庫体育・スポーツ科学 6 : 19-28.
- 松本耕二・國本明德・北村尚浩・仲野隆士 (2003) 障害者スポーツイベントにおけるボランティアの参

- 加動機-性別、年代別、活動経験別による比較-、  
山口県体育学研究46：11-20.
- 松本耕二 (1999) スポーツ・ボランティアの類型化に  
関する研究：障害者スポーツイベントのボラン  
ティアに着目して、山口県立大学社会福祉学部紀  
要5：11-19.
- 松尾哲矢・多々納秀雄・大谷善博・山本教人 (1994)  
ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウト  
に関する社会学的研究：指導への過度没頭と生活  
支障の関連及びその規定要因について、体育学研  
究39 (3)：163-175.
- 松岡宏高・小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を  
支えるボランティアの動機、体育の科学52 (4)：  
277-284.
- 文部省 (2000) スポーツにおけるボランティア活動の  
実態等に関する調査研究報告書、文部省、東京.
- Mowday, R.T., Poter, L.W. and Steers, R.M. (1982)  
Employee - Organization Linkages: The  
psychology of commitment, absenteeism, and  
turnover. Academic Press: New York.
- Poter, L. W., Steers, R.M. and Mowday, R.T. (1974)  
Organizational commitment, job satisfaction,  
and turnover among psychiatric technicians.  
Journal of applied psychology 59 (5)：  
603-609.
- 佐藤豊・前田博子・川西正志・北村尚浩 (1996) スポー  
ツ・ボランティアの参加動機に関する研究：1995  
年世界体操選手権鯖江大会について、日本体育学  
会第47回大会体育社会学専門分科会発表論文集：  
170-175.
- SSF 笹川スポーツ財団 (1996) スポーツ・ボランティア、  
スポーツ白書、SSF 笹川スポーツ財団：  
pp.88-99.
- SSF 笹川スポーツ財団 (2001) スポーツ・ボランティア、  
スポーツ白書、SSF 笹川スポーツ財団：  
pp.98-113
- SSF 笹川スポーツ財団 (2003) スポーツライフデータ  
2002、SSF 笹川スポーツ財団：pp46-49.
- VanYperen, N.W. (1998) Predicting stay/leave  
behavior among volleyball referees. The sport  
psychologist 12 (4)：427-439.
- 山口泰雄 (2003) 日本のコミュニティ・スポーツクラ  
ブの将来：スポーツ・フォー・オール視点から、  
21世紀のコミュニティ・スポーツクラブとクラブ  
ライフの振興に関する国際シンポジウムプログラ  
ム大会号、鹿屋体育大学：pp.324-327.
- 義村敦子 (2000) 研究成果の規定要因としての職務関  
与と組織コミットメント：エレクトロニクス企業  
の応用研究・開発設計の比較、組織行動研究30：  
41-49.